

□ 評 論

大 坪 盛

先ず2つの音楽評論賞のことから記すことにする。その1つ「吉田秀和賞」は、音楽に限らず広く芸術一般が対象の賞であるから受賞者が音楽関係者と限らないが、後に記すように今回は受賞作が音楽関係の著作にもかかわらず、受賞者が音楽の専門家ではなかったことが、大きな課題を呼んだ。しかも受賞者が日本を代表するジャーナリストだったから尚更である。また2016年は奇しくも柴田南雄と武満徹という日本の第2次大戦後の作曲界を代表する2人の作曲家の記念の年に当たった。柴田南雄は生誕100年、没後20年、一方の武満徹は没後20年で、音楽界では多彩な企画が展開されたが、音楽評論の分野でもそのことはいえる。

もう1つは「柴田南雄音楽評論賞」。柴田南雄は作曲家だが、東京大学の植物学科を出て晩年は放送大学で教鞭を執るなど後進の指導にも情熱を注いでいる。その最も大きな成果は、東京藝術大学楽理科の礎を築いたことであろう。加えて柴田は音楽評論・批評にも朝日新聞や各音楽雑誌上で健筆を振るった。その博覧強記ぶりは、作曲家としては勿論、研究、批評の分野でも多様な形で発揮されている。

その評論家・批評家・柴田南雄の業績を称えるため、1988年に当時のアリオ音楽財団によって創設されたのが、「柴田南雄音楽評論賞」である。現在は桐学園アリオ江戸音楽振興基金が主催する同賞は、「音楽評論を社会に広め、音楽文化の質の向上に貢献する音楽評論家を育成すること」を目標として、将来を期待される個人に対して広く募集するものである。柴田南雄の生誕100年・没後20年の2016年は、特別にテーマを設け、「柴田南雄の(と)○○○」なる15~25枚の評論に加え、2本の演奏会評の募集とした。1人の音楽家をテーマにしたのは同賞創設以来初めてのことである。

応募作8編を選考した結果、今回も本賞は出ず、奨励賞2人が選ばれた。仲辻夏帆(東京藝大大学院在学中)の『「優しき歌」—柴田南雄と立原道造の「時間的建築」』と、新田愛(愛知県立芸大在学中)の「柴田南雄のポストモダニズム—《合唱交響曲》『ゆく河の流れは絶えずして』とシュニトケの《交響曲第1番》の『多様主義』を比較して』の2作が奨励賞を受賞した。応募による音楽評論賞は現在も「柴田南雄音楽評論集」のみであることを考えると、新人評論家の登龍門としての同賞の役割と意義は限りなく大きいと思われる。

これに対して「吉田秀和賞」は冒頭に記したように、音楽だけでなく美術、建築、更には歌舞伎や映画までウィングを広げた芸術評論賞だが、応募賞ではなく当該の1年間に発表された優れた書籍に対して授与される。1990年の創設当初は吉田秀和、加藤周一、武満徹が選考委員だったが、現在は磯崎新と片山杜秀がつとめている。前述したように2016年は作曲家・武満徹の没後20年に当たるが、それに合わせて様々なコンサート企画や出版が実現、その1つが、ジャーナリスト・立花隆の「武満徹・音楽創造への旅」で、同書が第26回「吉田秀和賞」に選ばれた。同賞では11人目の音楽関係書籍の受賞となった。

立花隆の著作は文芸誌「文学界」で1992年から1998年までの丸6年間に亘り連載されたもので、18年を経て待望の出版とな

った。奥付の出版日は2月20日、奇しくも武満の20回目の命日である。立花隆は誰もが知る日本を代表するジャーナリストで、その執筆の対象は政治・経済から、宇宙、生命、芸術と限りなく幅広いが、音楽については本書が初めてと言ってよい。又内容も武満自身に対する長時間のインタビューは勿論のこと、武満周辺の人々へのインタビュー、更に豊富な資料の渉猟などによる武満との一体化ともいえる記述が行なわれているのは流石である。選考委員の一人である片山杜秀は「巨匠を真に理解するには巨匠級の日線が、天才を本当に分かろうとするには天才級の日線が必要だ。しかもその日線を送る者は送られる者と異分野の人が往々にしてうまく行く。」と選評で述べている。その意味では武満徹と立花隆の組み合わせはある意味で理想的といえるのかも知れない。

昨年出版されたもう1冊の「武満徹」本もここに挙げておきたい。武満徹研究者である小野光子著「武満徹 ある作曲家の肖像」がそれで、こちらは立花本とは違い、一つ一つの武満の側面を積み上げて書き上げた労作で、人間・武満、作曲家・武満を理解するのに相応しい書といえよう。

柴田南雄の方は彼自身の文章を集大成したものがこれまで2種類出版されている。1つは2015年に完結した「柴田南雄著作集」(全3巻)、もう1つは、これも柴田自身が朝日新聞紙上で展開した音楽会批評を集めた「柴田南雄 音楽会の手帖」(2016年刊)で、これは日本の音楽受容史にとって貴重なものといえる。一作曲家の眼(耳)からの限定されたものであっても、そこは博覧強記の柴田のこと、該博な知識と彼自身の個性が見事にブレンドされたものとなって、読み手を知らず知らずのうちに演奏会に立ち合っている状態に導く。名手の文章と言って良いだろう。これが演奏会評の原点でもあり終点でもあるといえる。

2016年には、前述の武満、柴田本の他にも、数多の書籍が出版されている。主なものを列挙するにとどめたい。「ロマン派の音楽 歴史的背景と演奏習慣」(アントニー・バートン/角倉一朗訳)、「『ヒロシマ』が鳴り響くとき」(能登原由美)、「希望のヴァイオリン ホロコーストを生きぬいた演奏家たち」(ジェイムズ・A・グライムズ/宇丹貴代実訳)、「音楽論」(白石美雪編)、「音楽に自然を聴く」(小沼純一)、「ラフマニノフ生涯、作品、録音」(森松皓子)、「フィリップ・グラス自伝」(高橋智子他訳)、「闘うピアニスト パデレフスキー自伝」(湯浅玲子訳)、「ピアニストは語る」(V・アファナシエフ)、「帝国のオペラ《ニーベルングの指環》から《ばらの騎士》へ」(広瀬大介)、「細川俊夫、音楽を語る 静寂と音響、光と影」(柿本伸之訳)、「世界のオーケストラ(2)~バン・ヨーロピアン、ロシア編」(上地隆裕)、「エッセイ・専務理事の独りごと」(金山茂人)を挙げておく。

独自の批評意識を持って活動していた宇野功芳氏が世を去ったことは惜しみて余りあるものがある。その批評・評論は多くの音楽ファンの支持を集めた。イタリア音楽の分野で大きな功績を上げた戸口幸策氏の死去も併せて記しておきたい。

文芸評論の世界では、文芸誌「すばる」の2016年2月号で「継承される批評2016」なる特集を組み、柄谷行人のインタビュー、大澤信亮と浜崎洋介の対談「小林秀雄をめぐる」他を掲載し、「今、批評とは何か」を問いかけている。更に文芸評論家の渡部直己が「今こそ批評の力が必要なのに批評は瀕死の状態。批評を蘇らせたい。」との意志で「日本批評大全」を出版した。吉田秀和、遠山一行、宇野功芳などの一時代を画した批評家が亡くなった今、新しい時代に向けて「何故今批評が必要なのか」、「批評で何が可能なのか」を問う本質的な論評が、音楽批評界にも待たれるところである。